

〈報告〉

サッカーにおける守備の重要性についての研究

—Jリーグ UR と J 大学の守備の違いについて—

中村 智洋^{*,**}・久保田洋一^{**}

A study of the importance of defense in soccer game

—The difference of defense between UR and JU—

Tomohiro NAKAMURA^{*,**} and Yoichi KUBOTA^{**}

1. 目 的

本研究の目的は、サッカーにおける守備力の違いがボール被奪取区域と失点率との関係に及ぼす影響を明らかにすることによって、競技力に応じた守備のあり方の基礎資料を得ることであった。

2. 方 法

分析の対象としたのは、Jリーグ1部リーグに所属 UR (以下, UR と表示) および関東大学1部リーグに所属する JU (以下, JU と表示) であった。UR については、2008年度3月から開催された第1節から第17節までの17試合中11試合を無作為に抽出し対象とした。JU は、2008年度4月より開催された関東大学1部における全11試合を対象とした。研究方法は、ボールを奪われてシュートに至った全ての地点を抽出し、ボールを奪われシュートを打たれた地点を○と表記し、ボールを奪われ失点したものを●として表記した。

本研究は、競技場を縦に3分割(相手ゴール側よ

り、アタッキング・サード、ミドル・サードおよびディフェンディング・サードとし) および横3分割(相手ゴールに向かって、右、中央、左) することでAからIの9区域に分割し、撮影した映像から、対象チームがボールを奪われてからシュートに至った地点を区域で表した。被シュート回数は11試合でボールを奪われてからシュートに至ったものを分析映像から算出した。また失点率は11試合の中での失点したシュートを、全ての被シュート回数で除して百分率で表したものとした。UR の試合の映像は、TV の映像を用いて録画・分析を行った。また、JU の試合の映像は試合時において、センターライン上メインスタンド上部からビデオカメラを用いてパニング撮影を行い、その後デコーダ上で再生して分析を行った。9分割で示した分布図から、UR と JU のボールを奪われた地点を比較した。さらに、UR と JU の失点率を比較した。本研究において、これらの地点および失点率は、それぞれのチームにおける守備能力の評価の指標とした。

3. 結果と考察

UR の被シュート本数は、118本であり失点数は10と少なかった。JU の場合には、被シュート本数は109本であったが失点数は16と UR と比較して多いことが明らかとなった。UR は、アタッキング・

* 東京都立大山高校

Tokyo metropolitan Ohshima high school

** 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科

Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University

サード18本でボールを失った時にシュートを打たれていることが明らかとなり、ディフェンシブ・サードでは45本のシュートを打たれていた。特にミドル・サードで55本のボールを奪われた時にシュートを打たれており、さらに、右サイドからの攻撃による失点(5)が最も多いことが明らかとなった。JUは、アタッキング・サード32本でボールを失ってシュートを打たれていることが明らかとなり、ミドル・サードで43本及びディフェンシブ・サードで34本のシュートを打たれていた。以上の結果から、前線でボールを失った時に、積極的な守備が行われていない、最終ラインの押し上げがないことが原因と考えることができ、ボールを奪われた地点および得点に至る数と区域との関係にはチームによる差があることが示唆された。URの方がJUよりも、結果から考えると守備に入るのが遅いのではないかと考えることができる。アタッキング・サードにおける、URの被シュート本数は18本であり、JUは32本であった。これらの数字から、URは相手チームに対して、シュートを打っている部分があった。JUは、シュートを打つかサイドからの攻撃にするかを選択している場面においてボールを失っていることが推察できる。JUに関して言えることは、アタッキング・サードでボールを失う本数を半分にすることができれば、得点する機会が増える可能性がある。JUの選手はURの選手と比較して、ボールに対するアプローチ・スピードの違いや身体能力の違いが伺える。ミドル・サードでボールを失うと、UR55本、JU43本と被シュート本数が他の区域に比べて多くみられた。この区域でボールを失うと、前線の選手も守備の選手も前係になってしまう状況であるので、シュートに至ってしまうことが多々見受けられるが、この区域における被ボール奪取は失点に結びやすいので注意が必要である。ディフェンディング・サードにおける、URの被シュート本数は45本であり、JUは34本である。両チームとも、この区域でボールを奪われた場合には、シュートを打たれてしまうのは防ぐことができないと考え

ることができるが、ディフェンディング・サードでできるだけボールを失わない粘り強い守備を行う必要がある。URは、9区域中7区域でボールを失い失点していた。また、JUにおいては、9区域中8区域で失点していた。1試合あたりの失点率は、URは、0.85でありJUは1.47で、その差は0.62であった。1試合あたりのURとJUの平均被シュート本数は、それぞれ、10.72本および9.91本であり、0.81本の差がみられた。URの場合は被シュート数が多いにも関わらず失点数が少なく、JUの場合には、被シュート数が少ないにも関わらず失点が多いことが明らかとなった。今後、URとJUの差が競技レベルの差であることを確認するために、さらに上位あるいは下位のチームについても分析する必要があると考えられた。また、同一の競技レベル(リーグ)内での分析をする必要があると考えられた。

4. 結 論

各チームの失点率は、ボールが奪われた区域によって異なることが明らかとなった。また、ボールを奪われた数および失点に至る数と区域との関係には守備力による差(Jリーグと大学リーグのボールに対するアプローチ・スピードの違いや身体能力の違い)があることが推察され、このことは、チームの競技力差も反映されている可能性が示唆された。

(当論文は、平成20年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科の修士論文を基に作成されたものである)

文 献

吉村雅文・野川春夫・久保田洋一・末永 尚：サッカーにおける攻撃の戦術について—突破の選手、フォロワーの選手、バランスの選手の動きについて—、順天堂大、2002他

(平成21年3月31日 受付)
(平成21年3月31日 受理)